巻頭言　入院中の高校生が教育形態として対面と遠隔を併用或いは選択できる環境整備を

－「第四期がん対策推進基本計画案」及び文科省通知「高等学校等の病気療養中等の生徒に対するメディアを利用して行う授業に係る告知一部改正案について」をふまえて－

全国病弱教育研究会 副会長　栗山 宣夫

今年は5年に一度おこなわれる「がん対策推進基本計画」が改定される年である。そのタイミングに合わせて、各関係団体による要望書の作成及び国への提出、或いは学習会の開催等、様々な活動がおこなわれている。その様々な活動や国の動向の中から、本稿では、高校生の教育保障に向けたものに焦点をあてて、整理して述べていきたい。

全国病弱教育研究会（以下：全病研）は、本年1月9日に開催された小児がん対策国民会議主催の学習会「学びあおう！小児がんの子どもたちへのよりよい教育をめざして～第4期がん対策推進基本計画策定に向けた各団体の要望書をもとに～」に、「公益財団法人がんの子どもを守る会小児・AYA世代がん対策政策提言のためのWG（事務局：がんの子どもを守る会）」（以下：守る会WG）と共に「協力」という形で参加した。

守る会WGは、多くの要望項目の中で、小児がん拠点病院への病院内学級高等部の設置を要望の一丁目一番地として求めており、そこは全病研の要望と同じである。一方、ICTによる遠隔支援（繋ぎ先は入院前の学校のみならず他の支援者・支援団体も含めて）がスムースに実施できるための環境整備も求めている。いわば、子どものニーズに合わせて、対面と遠隔とが併用出来たり選択できる環境を求めている。守る会WGはその選択肢の一つとして、遠隔の場合、双方向型のみならずオンデマンド型も選べるようにすることを要望した。

それに対して、文部科学省特別支援教育課は要望書提出時にオンデマンド型について理解を示し、早速、1月26日に「高等学校等の病気療養中等の生徒に対するメディアを利用して行う授業に係る告示一部改正」を公表し、2月25日までパブリックコメントを受け付けるという段階へと進んだ。その文科省が示した概要には以下のことが記されている。「令和3年度より実施している『高等学校段階の病気療養中等の生徒に対するICTを活用した遠隔教育の調査研究事業』等において、病気療養中等の生徒については、本人の病状に加え、治療の状況によって学習時間が前後することもあり、同時双方向型の授業に出席したくてもできない場合があることが明らかになっている」。さらに「3．留意事項」の欄に、「今後、以下のような内容を含む通知の発出を予定している」として「同時双方向型の授業同様、オンデマンド型の授業についても、対面による授業を相当の時間数を行うこと」と明記している。

つまり文科省も、ICTによる遠隔教育をおこなうための環境整備は進めつつも、全てがそれで担えるとは考えておらず、遠隔と対面のハイブリットでの支援がおこなえる環境を整えることが重要というスタンスであることが読み取れる。

一方、今回の様々な活動の中で、子どもがニーズに合わせて選べる環境を整えるのではなく、とにかく通常学級と同じ取り組みを提供できることが唯一であるかのような発言を耳にする機

会もあった。具体的には ICT を通じて通常学級の授業と繋がればそれで十分という意味であろう。院内学級不要論ともとれる。

これについてははっきりと「No」と言いたい。本当に短期入院が 1，2 回などの場合で、学習進度が遅れることもほとんどなく、入院中のストレスもさほど感じなくて済むようなケースであれば、そのような選択があってもよいと思う。しかし、医療が進歩したとはいえ、長期入院や、1 回の入院期間は短期化したとはいえ何度も入院を繰り返すケース等、学習の遅れや精神的なストレスが蓄積されてしまうケースがある。この場合に、「入院前の状態と同じになること」のみを目指した取り組みは、精神的にも学力の育成という意味でも非常につらくなってくる。そこをどうやって乗り切っていくか或いはそうならないためには何が重要かを、充実した院内学級の教育を経験してきた元・生徒や教師たちは知っている。

入院したからこそ「わかる」ことができた、学びの面白さを知ることができた、或いは同じような立場の仲間との共有体験や絆の深まりにより人生の大きな支えを得ることができた等の入院前とは違う新たな幸せとの出会いや創出が、子どもたちの生きる力の活性化につながる。これは、旅立っていった子どもたちも含めて、私たちが子どもたちから教わったこととして絶対に譲れないところである。その活性化に向けて支援することが病弱教育の大きな専門性の一つである。

私たちはその専門性を高めるために研鑽を積んでいく必要がある。そのための全病研でもある。学ぶことの面白さや「わかった」という実感をしっかりと経験した子どもたちは、遅れても何とか挽回する力を育んでいく。また、そのような主体的な活動は、ターミナル期と呼ばれる時期の子どもたちも最期まで充実した生を生きようと輝いている。

この信念に基づき、子どもがニーズに合わせて対面と遠隔を併用・選択できる環境整備に向けて、皆さんと共に進んでいきたい。